

大谷先生にお伝えできなかったこと

浅田順之

大谷先生がお亡くなりになって、早くも2年の月日が経とうとしていますが、生前に私が受けたご恩に対して感謝しきれなかったこと、お伝えできなかったことを、後悔も含めて書き記したいと思います。サイエンティフィックな内容ではありませんが、どうぞご容赦ください。

1. 大谷研究室と私

なんのあてもなく電通大で過ごしていたためか、私は、学部の4年生になっても、なかなか卒業研究を行う研究室が決まらなかったのですが、学科から「大谷研しかないね。」と言われて訳も分からず大谷先生にお会いすることになりました。聞けばEBITという、すごいプロジェクトの立ち上げをやっているとのこと、先輩もみんな忙しそうにしているし、何といても研究テーマが原子物理学ときたので、ますます不安になりました。初めて大谷先生とお会いしたときに何を話したかは全く覚えていませんが、大谷先生の強面の雰囲気にもまれたことは記憶に鮮明に残っています。

今になって大谷研究室の印象を思い返してみると、「多様な価値観を受け入れる雰囲気」があったと思います。その結果、OBとして、普通の会社勤めしているサラリーマンのほかに、新聞記者、自衛官、特許事務所勤務、役人といった多様な職種の人々を輩出しています。私の同期の学生が「大谷先生は、変な学生ばかり集めているんですか？」と直接質問をして、周りが慌てたことがありましたが、その答えは、「大谷先生は多様な考え方をを持った多様な学生を受け入れてきた」というのが正しい答えなのかもしれません。

私は怠惰な学生であったにも関わらず、大谷先生に博士後期課程への進学を認めていただきました。しかし、国家公務員試験の合格を機に別の道を歩むこととし、電通大を後にしました。そのときも何一つ苦言を呈することなく送り出してくださいましたことを覚えています。これもダイバシティーを大切にされてきた大谷先生のお気持ちでは

ないかと感謝しています。

2. 電通大を離れてもお世話をかけ

私が電通大を離れる頃には文部省重点研究領域によるサポートでEBITが完成して、次のステップとして、科学技術振興事業団の多価冷イオンプロジェクトがはじまり、本格的な物理実験がスタートしていました。

実は、私の妻の桂子は、当時、多価冷イオンプロジェクトの事務員で大谷先生夫妻の媒酌で良縁に恵まれることができました。町工場のおやじの息子である私と大学教授の娘である桂子の結婚はある意味不釣り合いで、大谷先生が互いの家の紹介をするのに一苦労されていたのを見て、本当に申し訳ないと思ったのを覚えています。勝手に研究室を飛び出して行った学生の私に救いの手を差し伸べてくださったことに本当に感謝し、大谷先生の心の広さに驚愕した瞬間でした。

3. お伝えできなかったこと

大谷先生に最後に声をかけていただいたのは、最終講義の際にお会いした時のことでした。「ご立派になられて」とおっしゃり、私はいろんな意味で恥ずかしかったことを覚えています。

私の理解では、大谷先生は役人があまり好きではないので、当時の私や役所をみて「しっかりやれよ」と叱咤激励してくださったのだと考えています。あれから約7年たちますが、この言葉と理解は私の行動規範のようなものになっています。

話は電通大時代に戻りますが、中村信行准教

授が理学博士の学位を取得される時、「学位はこれから研究者としてやっていくのに必要な運転免許のようなもの」と大谷先生がおっしゃったことを覚えています。実は、大谷先生の最終講義のときには、私は横浜市にある大学に勤務先から派遣されており、博士号取得目前でした。研究者でもない私には「運転免許」というわけでもないので、このことをお伝えすることをためらってしまいました。博士論文の製本が終わった時も、お送りしようか迷ったのですが結局、大谷先生にはお伝えできずじまいになってしまいました。

もし、博士号取得をお伝えしていれば喜んでくださっただろうか。お伝えしなかったことに後悔していますが、ダイバシティーを許容する大谷先生なら「レーダ信号処理」で博士論文を書いたとしても、「レーザー」が「レーダ」に変わったねとニコリ笑ってくれそうな気がします。

4. おわりに

大谷研究室から巣立った学生は、原子物理学という土俵の中で育てられて、その結果さまざまな分野で努力する人材になっていると思います。このような、人材を輩出できたのは大谷先生の多様性を甘受する心の広さゆえのことと考えています。教育者としての大谷先生に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。また、本稿執筆に際し、今一度自らの振る舞いが社会に役立つものかを考える機会を与えていただいたことに感謝いたします。